

平成 30 年 9 月 15 日

む つ み

2 8 2

日本国語教師の会「樺の会」

第五十四回日本国語教師の会「樺の会」宇都宮大会報告号

三 ところ 宇都宮大学教育学部棟ほか

四 日程

例年、全国行脚をしていた夏季合宿研究会（通称…全国大会）ですが、十年前から新たな実施の形として、東京近郊において、一泊二日で行うことになっていきます。今年は第二十一回日光鬼怒川大会以来、なんと三十三年ぶりの栃木県での開催となりました。

【第一日】八月四日（土） 宇都宮大学6号館にて

1 受付 九：〇〇～九：三〇

第五十四回宇都宮大会の概要を報告いたします。熱中症が騒がれる最中、「熱い」論議の交わされる会となりました。

2 開会式 九：三〇～九：五〇

第五十四回 日本国語教師の会「樺の会」宇都宮大会

一 主題 ことばを育て人間を育てる国語教育

―学び続ける主体を育てる国語の教学―

主催 日本国語教師の会「樺の会」
後援 宇都宮市教育委員会

- ① 開会のことば 柏村 政（日光鬼怒川大会委員長）
- ② 挨拶 大会委員長 山中 勇夫（栃木）
- ③ 大会運営の連絡 大会事務局長 海老澤 正臣（栃木）

午前の部 司会 名取 俊夫（東京）
3 はじめの話 九：五〇～一〇：二〇 川村 滋（栃木）
○「日本国語教師の会」と私

二 とき 平成三十年八月四日（土）～五日（日）

・昭和五十五年第十六回白河（那須甲子）大会に初めて参加。
・修練の場で充電の機会…「自らやってきたことを発表したい」という気持ち。同じぐらいの若い先生方の発表から学ぶ修練の場。

・石田佐久馬先生との出会い：研究は厳しく、人間関係は温かく、お人柄のすばらしさ。えらぶらない。難しい専門用語ではなく、わかりやすいことば。

・この会を通して、他大学附属の先生方との出会いも。

・「吾以外皆我師」について：自分以外の人はすべて師率直に語ることでできる会であること。この会での発表したものを実践記録として執筆。実践を振り返るまたとないチャンスになる。

○大会主題について

・「ことばを育て人間を育てる国語の教室」

人間の営みのねっこには、ことばが介在。考えたり書いたものを共有したりしていく。実生活に生きることが大事。実生活ばかりが強調されてはいけないが…

・「学び続ける主体を育てる」条件は？

① 学びそのものが楽しいこと。読んでみたい、書いてみたい、考えてみたい、話し合ってみたいといった取り組んでみたい課題をつくり出すこと。

② 成長、変革…自己学習が必要。身につけた知識、技能、経験を元に、新たな課題に向かい合う姿。自己を振り返る→自己変革の機会

○皆さんに期待すること

自己の課題解決。学び合い。つながり。

4 研究発表 一〇〇三〇〇〜二二〇〇

① 「国語学習の基礎をつくる日々の指導と授業実践

『言葉の力』をつける一年間〜

横須賀市立野比東小学校 長谷川 泰子(神奈川)

○一年生担任として「言葉の力」の獲得を大きな課題に、特に書く体力をつけるべく計画的に学年揃って取り組んだ。日々の積み重ね。
・朝の会の工夫(歌や「クラスの詩」の暗唱、呼名の返事にひと言付け加えさせるなど)・読み聞かせ(朝の会、帰りの会を利用)・家庭学習の工夫(音読、漢字、国語、算数等を一枚のプリントにまとめた「宿題ランド」の実施)・視写、聴写(特に聴写に重点)・あのねノート(日記)の継続・「ことばのたからばこ」の掲示(習得した言葉を短冊に書き模造紙に貼る)

○授業実践

・かいがら(東京書籍一年上)：動作化を入れ、一番好きな貝殻をうさぎにあげたくまのこの気持ちを考えさせた。自分事にして自分の言葉で語れるよう生活科で実際に貝殻を海で拾わせた。

・サラダでげんき(東京書籍一年下)：子どもには絵が大切である。読み取った内容をサラダの絵に表すことで、誰がどんなことをしたかを考えることができた。

○年間を通して指導の中で心がけたこと

・音読の工夫(指さし読みで文字の音声化を意識)・聴写(すぐには板書しない)・「ことばの時間」(例文作り)を多く確保・絵の活用(理解の一助として板書にも多くの絵を取り入れた)

○成果と課題

学年全体で取り組んだことで、一定の成果は認められた。身につけた力の維持、伸長が今後の課題。学校全体での意識的な取り組みが必要である。

◇特別発言

片山 守道 (東京)

何をやるかより「どのようにやるか」の大切さを実感する細やかな手立てである。「宿題ランド」では保護者を見事巻き込んでいる。「サラダでげんき」では構成(はじめ、中、終わり)を意識させ全体像を把握させるのに、四つ切り画用紙のあの大きさが非常に効果的である。今回の指導により着実に言葉の力をつけた子どもたちには、自分から言葉の海を泳げるようになってほしい。学年が上がるにつれ、さらに学びを主体的に行ってほしい。

② 「アクティブ・ラーニングを支える対話力の育成について」

上三川町立本郷小学校 森 健 (栃木)

十年間の中学校勤務を経て現在再び小学校に勤務している。双方の校種を経験して感じる大きな違いは二つある。一つ目は「卒業」に際して、中学生には極めて現実的な出口(義務教育修了による進路選択)が待っているということ。二つ目は「授業時数」について、中学三年生での国語の授業は週にわずか三時間であること。母国語でありながら英語(四時間)より少ないというのが現状である。そのように限られた時間の中で効率よく生徒の思考力を高めるために試行錯誤した結果が「相互作用的な対話のある学習」なのである。

「相互作用的な対話」とは

「アクティブ・ラーニング」と「話し合いのある授業」の違いは「対話の質」にある。「放ち合い」でなく「話線」ができるような「相互作用的な対話」が行われているとき、学習者はアクティブ・ラーニングを行っていると言える。

△「放ち合い」：双方が言いたいことを述べ合っている状態。

○「話線」：前者の話を受けて後者が発言、というキャッチボールのような応答の際、球筋に例えた話の線。

「相互作用的な対話」の育成

話線をつなげるためには「相手の話を引き出す」ことが大切である。訊くためには相手の話を聴かなければならない。「訊くために聴く」には①語尾を「〜か?」「〜ね?」にする。②「きき方(応じ方・返し方)」を教える。③話の「運び方」を教える。

◇特別発言

片山 守道 (東京)

子どもの内面をアクティブにし思考力を高める上で「きく(訊く・聴く)」指導がいかに重要であるかが分かる。教材開発も素晴らしい。「話す」ことと違い「きく」ことは目に見えにくいのが、『きく』こととは、こういうこと」と子どもにも認識させていくことで深めていっている。早々に結論を出すのではなく「主体的・対話的・深い学び」を三位一体としてテーマに多面的に迫り、深まりのある話し合いを目指していける手立てである。

【記録 山田 浩子(埼玉)】

5 先達に学ぶ 一三・〇〇〜一四・一五

① 「細やかな手伝い(小論文の添削指導)を通して」

柴田 悦子 (栃木)

◇論文の手伝いを通して思うこと

退職してから、宇都宮大学にて教員採用試験を受ける学生のために論文の指導を行っている。学生に指導する中で、論文が書けないことが問題であった。理由として、学生は今までに論文の指導を受けていなかったり、論文が何なのかを理解できていなかったりした。そこで、よりよい論文を書くための指導を行った。

◇三段落法、構想力のスキルアップ

学生は五分で八百字〜千字を書かなければならない。そこで、三段落法が一番、効果的であった。序論では、課題を書く。本論では、具体例を書く。結論では、序論のまとめを書く。さらに、これから教員としての姿勢を書くことと教えた。

構想力が身につけていなかったため、論文を書くことを何度も練習させた。課題について中途半端な解釈が多いため、咀嚼力を付け、論文の全体を見通し、構想力をつけるように指導した。

◇学校での指導で大事なこと

教育は、子どもに『生きる力の基礎』を培うことである。学級経営では、子どもたちが喜んで楽しんで、主体的に学べる場が必要である。読書指導も大事であり、人間が出来上がると考える。「教師は授業で勝負」をしなければならない。

② 「鉄脚と老脚」

瀬戸口 憲一 (埼玉)

◇はじめに自己紹介と現在の状況

退職されて、十五年、国語とは関係ない生活を送っている。最初は老人福祉センター所長、次にコンビニの経営、現在は障害を持つ児童施設の手伝いをしている。他に法務省人権擁護員を行っている。

◇「鉄脚の思い」

国語教育との関わりについて。日本国語教師の会では、齋藤隆一先生の出会いがあった。埼玉大学での国語の勉強会、樺の会で勉強させていただいた。未熟だった故に学ぶことよって、子どもたちの前に立つことができた。「代悲白頭翁(白頭を悲しむ翁に代わる)」劉廷芝の漢詩について、この漢詩は今の自分にぴったりの詩であると漢詩と自分を重ね合わせた。

◇「老脚の歩み」

法務省人権擁護員を行っている中で一番多い悩みは隣人間の問題である。相談が幅広く、指導はできない。「ああ、そうですか」、「それで」、「どうしたいの」と傾聴することが大事だと考えている。相談者の悩みを傾聴することで相談者自身が何か見えてくることがあり、結論は相談者が自分で見つけられるようにしていく。コンビニ店舗の運営も同じで、人の心に訴えることが大事である。

クリスチャンとして、聖書から神との対話を通し、自己の内側の語り合いを行っている。自分はどのような生き方を選んでいくかを考えている。

6 ゲストの話 (記念講演) 一四三〇〜一六〇〇

『寄り添うことば くラジオから学ぶ』

講師 佐藤 由紀子

(フリーアナウンサー 元・FM 栃木 [Radio Berry])

一 伝わるように、伝える

基本的なアナウンス技術が三点ある。

1 点目が「声色 (表情) を工夫ししっかりと発音する。」ことである。ラジオでは音声だけで伝えなければいけない。話題によって声色を変える必要がある。そこで、天気など生活に密着したものは明朝体の原稿を、エンタメなどの話題ではゴシック体の原稿をそれぞれ用意する工夫をしている。

2 点目は「アクセント」である。「橋と箸」の違いのように、アクセントに注意しながら原稿を読んでいる。聞き手の誰もが分かるように、アナウンス辞典を活用しながら原稿を読んでいる。

3 点目は「間のとり方」である。人が集中して話を聞けるのは約三分間だと言われている。一本調子にならないよう、話すスピードやメリハリをつけて、聞き手が集中できるように話をしている。

「書き言葉」ではなく「話し言葉」を意識

新聞の情報を見て分かる「書きことば」とすれば、アナウンサーが伝えるのは聞いて分かる「話しことば」。約はおよそ、計は合わせて、全はすべてなど、やさしい言葉に噛み砕いて伝えている。

語尾の大切さ

一つの言葉が繰り返されると聞き手は不快感を感じる。口癖など気をつけて話をする。また、語尾は話の印象を大きく変える。例えば、「〜ですよね。」では押し付けがましい印象を聞き手に与えてしまう。気持ちよく聞いてもらえるよう、言語環境を整えることが必要になる。

二 ラジオは人に話しかけるメディア

テーマを設けてリスナーからメッセージを受け取る。そのメッセージによって話の順番を変え、番組の構成を考えていく。テーマやメッセージを共有することによってリスナーと共に番組を作り上げている。

想像するから楽しめる

情報原稿を読んだり、話をしたりするときに、聞き手の「みなさん」ではなく、「あなた」に話をしている、という思いで話をする。聞き手がうなずいているところまで想像している。聞き手が何と言っているのか想像しながら語りかけている。また、聞き手の想像をかき立てるような言葉を大切にしている。声だけだからこそ、番組で話をしている人の気持ち、が聞き手に伝わる。

週刊誌も読む

「週刊誌を読むのも仕事」のうちである。週刊誌や新聞など、多く

のメディアに触れ、アンテナを高く張っている。ラジオにおいては「雑談力」がベースとなって話ができる。

三 表現者であるということ

ラジオでしゃべる仕事を「パーソナリティー」と呼ぶのは、伝える側の気持ちや思いなど自分自身をさらけ出す仕事であるから。

笑い方次第で聞き手を愉快にも不愉快にもさせる。そのため、メイクへ向かって話すことに責任があり、ウソはあつてはならない。

ラジオは、同じ時間を共有する人たちと気持ちを通わせ、聞き手の心に寄り添うことが出来るメディアだと考える。

そこで、どんなメッセージがきても、必ず共感する。「頑張つて」と言わずに「一緒に頑張つていきましょう」と言っている。

時には自分の失敗談を話し、聞き手の共感を得るようにしている。幸せな話や楽しい話よりも、場合によって失敗談の方が聞き手に受け入れられやすい時がある。

何か温かいものを届けたい

そんな「パーソナリティー」という仕事をしていて一番大切にしていることは「聞いている何万人のうち、一人にでもいいから何か温かいものを届けたい」ということだ。自分自身をさらけ出し、聞き手を想像しているからこそ伝わるものがある。

【記録 飯塚 健太(埼玉)】

7 記念写真 一六〇二〇 宇都宮大学構内にて

8 懇親会 一八〇〇〇〜二〇〇〇 ニューイタヤホテルにて

司会 廣瀬 修也 (東京) 横内 智子 (東京)

☆参加10回表彰 内田 ひろこ (東京)

【第二日】 八月六日(日) 宇都宮大学8号館にて

1 受付 九〇〇〇〜九二二〇

2 実践報告分科会 九二二〇〜一一一五〇

◆低学年分科会 司会 横内 智子 (東京)

①「書く力を高める言語活動の工夫」

〜年間を通した朝学習の実践〜 (二年)

お茶の水女子大学附属小学校 川口 有美 (東京)

○「書くこと」に苦手意識を持つ児童が多かった。自分の思いや考えを進んで表現することができる児童を育てたい。」という思いから「朝の時間」(週二)に書く活動を年間で計画を立て取り組んだ。

○語彙の充実、季節の詩の視写や言葉集め、俳句作り、折り紙の作り方の説明、絵描き文、漢字・言葉集め、連想言葉リレー、五感を使った言葉集めなどを行った。

○語彙が増え、苦手意識がなくなり、書く力が高まった。

○話し合い

・年間を通じて計画的に実践をしていた。実態に合わせて計画を立て直しているところもすばらしい。

・活動したことを掲示などでみんなに知らせることができるとよい。また、活動の足跡をまとめて残せるとよい。

・子ども達が喜ぶ姿が伝わってきた。

◇特別発言

秋山 誠 (東京) 加藤 智子 (埼玉)

秋山：一年間の積み重ねのゴールが文集で、子ども達は達成感を得ることができた。作文では、まず書き上げたことを認める。推敲では「質問があったら相手に伝えよう。」と投げかけるとよい。

加藤：言葉集めでは、「使った言葉にシールを貼る。」など楽しく学ぶ工夫がされていた。シールの色を種類別に変えると意欲が高まる。作品は同じサイズの用紙に書いてため、保護者に貼らせる方法がある。よい表現には金シールを貼って価値付けをする。

③ 「共有」について考える

～「えいつ」「すみれとあり」「スーホの白い馬」～(二年)

東京学芸大学附属大泉小学校 今村 行 (東京)

○目指すのは「自分とは違う意見をもつ他者のことや考えている自分自身のことをわかりたいと捉える姿」。そのためには、共有する場が重要になる。三つの実践から「共有」について考える。

○各単元、問題意識をはっきりさせて取り組んだ。

○三つの単元を通して、共有の素地が整ってきた。「質の高い共有の

姿」とはどのような姿か。教師の価値付けが大きな意味を持つ。

○話し合い

・何を共有するかが大切。まずは自分の考えを持つこと、そしてその考えについて話し合う。授業を繰り返すことで意見の違いに気づき、それが日常生活につながるという。

・黒板の使い方がよい。子ども達が友だちの意見でプレートを動かしていく。考えが可視化されてわかりやすい。

◇特別発言

秋山 誠 (東京) 加藤 智子 (埼玉)

秋山：全員を同じ土俵にのせないと共有にならない。教師の役目は、土俵にのせるための手立てを行うこと。前単元に共有の体験をしたことが、次の授業で生きていた

加藤：教師の思いが、授業での言葉の端々に表れていた。授業記録の後に教師の感想が入っているところがとてもよい。

【記録 荒川 奈津子 (埼玉)】

◆ 中学年部会

司会 久保 由美子 (神奈川)

①児童が意欲を持って主体的に書くことをめざして。生き物博士になろうく生き物のとくちょうをくらべて書こうく三年・教育出版

さいたま市立大谷口小学校 飯塚 健太 (埼玉)

書きたくてたまらなくて、友だちにみてほしいと思えることを目指した。①自分たちで学習計画を立てさせる②相手意識を持つ③モデル文を示すの三点に重点をおいた。学習計画表を作り、調べる生き物を決め、図書館やインターネットで調べた。そして、説明文の

書き方を知り、組み立てメモを書き、直した組み立てメモをもとに、説明文を書いた。その後、作品の交流をし、コメントをもらった。

○話し合い

- ・説明文ならではの言葉や図を入れる意味などはおさえるべき。よりよい書き方をどのように子どもにも気づかせていくかが大切。
- ・まとめという言葉は曖昧。考察か、感想か。

◇特別発言

若林 富男 (茨城) 濱田 芳子 (神奈川)

若林…めあてを持つ、ゴールを描くことが必要。交流については、揭示していいこと見つけカードをつけていくのもいい。この単元は、動物を決める、比較する観点を決める部分はもつとじっくり丁寧に決めさせていく必要がある。

濱田…ここは、技能をつける単元。メモの力、整理の力。それが総合や社会の調べ学習につながってくる。最初の大切な部分は教科書で全体で確実におさえる、そして読み合いを通して、交流を生かし再度、自由度をあげパート2を書いていくのもよい。

③ 「書くこと」好きを増やすためのアプローチ

「みんなで新聞を作ろう」の指導を通して (四年・東京書籍)

那須塩原市立南小学校 渡邊 望 (栃木)

本単元では、書き方がわからない児童へのアプローチ(視写、記事の書き方)、何を書けば良いかわからない児童へのアプローチ(テーマを全体で統一、相手意識)を行なった。グループで一つの模造紙に書かせた。その後新聞を読み合い、よいところを探す活動をした。

読んだ感想には、色の工夫、相手意識のあらわれなどがあがった。

○話し合い

- ・グループ活動は、目標に対する児童一人ひとりの評価が難しい。
- ・記事のスペースの割り付けを決め、個人のをあらかじめ紙を分けて分担すれば時間短縮になったのではないか。

・書く内容も相手もグループで決めさせたというのは、意欲も高めたが、統一した指導、交流が難しそう。

◇特別発言

若林 富男 (茨城) 濱田 芳子 (神奈川)

濱田…書く力をつけるうえで、編集会議が一番大切。書くことの意味を考える。子どもは、個人を発信したい。書くことは、伝え合うツールである。まずは学級の友だちに自分のことを知ってもらうことが先。新聞づくりは継続しておくことが力を高める。壁新聞は、良さもあるが、書き直しが大変、学びの記録を個人に残すことができないなど難点もある。

若林…教科書にあるモデルは、重要な学習内容がつまっている。参考にすべき。要素としては、アンケート・アンケート結果、季節の様子、社説など身近な内容を扱わせたい。新聞は、国語物語文のまとめや他教科でも(登場人物に聞いてみましたなど)、さまざまな場面を取り入れることができる。これから情報を分析して表現する力が求められる。楽しみながら自分の言葉で表現していける実践をしてほしい。

【記録 鈴木まゆ子(東京)】

◆高学年分科会 司会 佐藤 博 (岩手)

① 推薦文を書き、共有することの授業

—お札の肖像画にしたい人物を推薦する(6年)—

お茶の水女子大学附属小学校 廣瀬 修也 (東京)

○単元の目標

- ・自分の考えの根拠を明らかにして推薦文を書くことができる。
- ・推薦したい人物像を捉え、自分の生き方を考えることができる。

○話し合い

- ・書いた後、どのようにしたか。：お札を作りその下に文章を書いて投票するなど目に見える形にするとモチベーションが上がる。
- ・作文指導とは：①目的・相手意識を↓個人なら手紙、不特定多数なら抗議文・掲示文というように、相手を明確にすることで技や文章の長さ等も決まってくる。②主題を明確に↓調べたことを眺めて自分が訴えたいことを簡潔に書く。③組み立てを考える。
- ・評価の仕方について：他人の評価の前に自己評価。コメントを書き合うことはよいが、それを活かせるようその先の計画が必要。
- ・技能の習得について：事前に教科書教材と関連させて計画的に指導する必要あり。(読解の学習の時に教えておくとよい)。

○特別発言

豊泉 行男(静岡) 松木 正子(東京)

豊泉：作文指導は習熟度別にやったこともある。推敲し合うのは下書き段階がよい。間に一斉授業を挟み書き方等の確認をするとよい。
松木：取材の時、調べる観点・基準が必要。(何故お札にふさわしいのか)教師は、何をしたかではなく、何を学んだかという学びの履

歴を作れば、どんな力をつけたかが明確になる。

② 児童が「思いを伝え合う場」を生むための工夫

—「風切るつばさ」を読む中で—

宇都宮市立城東小学校 金田 真弥 (栃木)

○単元計画

- ① 全文通読。初発の感想から学習課題を考える。
- ② 登場人物の関係性に着目して、中心人物クルルの心情の変化を読み取る。(思いを伝え合う場)
- ③ クルルの心情の変化について、文章の叙述に沿ってまとめる。

○話し合い

- ・人物の心情を読み取り、思いを伝え合うことが目的であれば、何を根拠にするかを明確にし、共有、検証、練り合いがあると深まる。根拠は、叙述に求めるべき。教師は中心となる言葉を拾っておくこと、整理してあげることが必要。

・初感想で疑問を書いたら答えも書く。そうすると答えも問いになり一層学習意欲が湧く。文学作品の結節点や、一つの問いから細分化し発展していくような中核的な問いを取り上げること。

◆特別発言

豊泉 行男(静岡) 松木 正子(東京)

豊泉：授業が付けた力と一致しているか丁寧に。人物相関図は大車。それを見せながら話し合うのもよい。俯瞰して読むことも必要。
松木：学習のねらいとそれに対する実践の成果と課題というプレゼンの仕方を考えるとよい。全文掲示した時には座席の向きも考慮。

【記録 水垂 弘枝(埼玉)】

午後の部 司会 平野 登志江 (千葉)

3 パネルディスカッション 一二・五〇〜一五・一〇

◇テーマ「学び続ける主体を育てる国語の教室」

◆コーディネーター 岡田 博元(埼玉)

◆パネリスト 山中 勇夫(栃木) 内丸 友之(茨城)

渡辺 哲男(東京)

*パネリストからの提案

山中

言葉〈世界〉をこわす、その「動的過程」に目を向ける

・作文指導の実践より、指導上の方法論に対する警戒が生じた。それは、子どもを結果やカタチに当てはめる指導では、叙述にそった美文が書いていても、子どもの実態とは違った表面的なものではないということだ。

・言語化ができない場面において、子ども達から生まれたものがある。自分の経験や価値観に潜り言葉を紡ぎ露出することだ。この自分の経験や価値観に潜り言葉を紡ぎ露出する「力学」で捉える世界こそが必要で大事なこと。

・つまり、教師は、教育のあらゆる活動において、結果やカタチではなく、等身大の更新を続ける「動的過程」を大切にすることが必要であると考える。

内丸

江戸川学園取手小学校の実践より(七つの習慣の木・読書教育)

・江戸川学園取手小学校の実践において「七つの習慣の木」(てつが

く)がある。このてつがくを子ども達は基盤において、各教科の中に生かし、自ら学び続ける主体を自主的に育てている。

・今、未来に向けて幅広く起動していくであろうAIの導入は、目覚ましく発展している。しかし、人間を脅かすものでもある。正に、その事態を危惧し、学力向上に向けて取り組んでいるのが、読書活動だ。(読書貯金、リーディング・ワークショップ、ブックバズ等)子どもの読書活動においても「七つの習慣の木」は活用されており、自尊心や、自己決断力・自己有用感等を高めたりして個々の主体を培っている。

渡辺

「学び続ける主体」が成立しうるのかを問うく中動態とa i b oから

・新型a i b oと関わる中、自分の振る舞いから見えてきたことがある。a i b oは、人間に規制をかけているということだ。このかける規制には、能動態と受動態と共に存在していたという中動態が当てはまる。(中動態||日本語には存在しない言葉)

・「学び続ける」ということは、國分功一郎(哲学者)の「カタアゲ問題」で述べる内的必然性に従う・従っていないという視点でいうと、子ども達は、従って行っていると言える。すなわち、ベクトルの向きだけでは、能動か受動かを判断しきれないことが理解できる。

・「学び」をどのように育てることができるのか。美学者の森田亜紀が述べるゴミ箱ロボットからは、ゴミ箱ロボットと子どもの間に

発生した、おのずからゴミを拾ってゴミ箱に捨てるようになる「誘惑」からは、「学び続ける」ための「操作」が見えてくる。そして、「教育」も「誘惑」だと述べている。

・私とa i b oとの間には、不安定さ、不安定から誘惑も生じていた。つまり、教師と子どもの関係において「学び続ける」を可能としていくならば、演劇的な振る舞いは外せず、あざとく子どもとコミュニケーションをとることではないか。

*フロアからの質問・意見・討議(主なもの)

○「七つの習慣」に順序性はあるのか。また、支援を必要とする児童の対応は。

内丸 第一の習慣と第三の習慣をベースに流動的、柔軟に扱っている。支援を必要とする児童の手だてはある。教師が学習のプロセスと一緒に振り返り、見直し、繰り返しして対応していく。

○動的過程における子どもが伝えようと成長する力ギは。

山中 子どもが素直に自分を出していけるよう教師が干渉すること。

○野口先生の型に縛られてはいないか。命の露出は、教師が求めてするのか。

山中 型に縛られないことは難しい。教師自身も型を壊し続ける動的過程が重要。教師の腹を探る児童ではなく、腹を割ってほしい。

○自分の型・様式、渡辺先生の中動とは。

渡辺 森田亜紀さんのゴミ箱ロボット(不定性)の誘惑。子どもの主体性を喚起するジレンマ。a i b oと先生の関係性は、まさに赤

ちゃんと母親の関係と同様。人間も関係づけられ、そして、主体が生まれる。

*対談

岡田 主体的な授業の胆には、自己肯定感・継続が必要ではないか。

内丸 自分の中に他者を受け入れ、互いに対話し繰り返ししていく。

岡田 授業の型があるからこそ、互いに理解し合い、優れた読みができる。渡辺先生の学び続けるとは。

渡辺 東井義雄の偶然性を装った博打を打つようなこと。

*今後に向けての提案

内丸 中動態を自覚しながらやっていきたい。型の問題については、守破離を実践していきたい。

山中 渡辺先生の話す「演劇的な振る舞い」については、自分がそうである事実を壊し続けていきたい。型については、促成栽培を求めてしまう弊害と考える。

渡辺 学び続けるとは、自分で作って壊していくこと。教師も子どももクライシスに立ち、力をつけていくこと。

*まとめ

岡田 今の国語の授業には、生きたことが行き交っているだろうか。教師と子どものやり取りが少なくなっているだろうか。教師は、相応しい問いを考え、誠実に授業をつくらねばならない。

【記録 根本 晶子(埼玉)】

4 まとめのお話 一五・二〇～一五・五〇

「学び続ける主体を育てる国語の教室」

元新宿区立余丁町小学校 安田 恭子 (東京)

○授業を見せていただく中で、教師の言葉・文字・声の音量・口形・発声・文末の曖昧さ・頻繁な言葉の言い換え・正解を促す問いかけ等が気になっている。子どもの思考を邪魔しないよう、的確に、相応しい問いかけをしなければならないと考える。

また、全文掲示が流行っている。教科書をそのままコピー・拡大し、白い紙なのに黄色い波線・サイドラインを引いて学ぼうとする授業を見る。コメントの文字は実に粗雑。板書の時にも、行がえを言葉の途中とする無神経さが気になる。授業者は丁寧に誠実に授業を作っていく必要がある。

○ゲスト佐藤由紀子フリーアナウンサーの話が楽しく気持ちよく届いた。「パーソナリティ。聞き手に寄り添う。聞き手を大事にしている。」は、心の中にずしりと落ちた言葉である。

○分科会の六人の先生方の実践は実に見事。話し合いが充実していて、それぞれの実践の付けた力が明確になっていた。

○二日間の学びを通して、人は一人で学んでいない。周りの人とのつながりの中で今ここにあると痛感。七三年前の大戦でも、七〇数年経つての東日本大震災等でも、奪われなくてもよい命が失われ、繋がれていたネットワークが断ち切られた。改めて尊い命をもう一度考え、私達の繋がりを大事にしながら、今回の学びの資料を読み返し、学び続ける主体を育てたい。【記録 堀江 まり子(埼玉)】

5 閉会式 一五・五〇～

- ・ 会代表の挨拶 蓮沼 信子(埼玉)
- ・ 参加者代表の挨拶 堀内 多恵(栃木)
- ・ 本部事務局からの連絡 若林 富男(茨城)
- ・ 閉会のことば 山中 勇夫(栃木)

6 交流の集い 一七・〇〇～

【予告】

第五十五回日本国語教師の会「樗の会」横須賀大会

- 1 主 題 ことばを育て人間を育てる
↳サブテーマ検討中
- 2 と き 二〇一九年八月三日(土)～四日(日)
- 3 と ころ ヴェルクよこすか

【アクセス】京急横須賀中央駅から徒歩五分

【宿泊・懇親会】 セントラルホテル横須賀

【アクセス】京急横須賀中央駅から徒歩一分

【参考・これまでの神奈川県開催】

- 第七回 (昭和四六) 箱根大会(箱根町)
- 第三十四回(平成一〇) 神奈川大会(横浜市)
- 第四十六回(平成二二) 横浜大会(横浜市)